



# 大人の保育と 子どもの保育

津守 真

私はいま、大人の福祉施設で、すでに成人した人と付き合うことが多い。大人の場  
合でも第三者として観察し評価するのではなく、人間として対等にその人とかかわる  
ことが保育の根本であることは子どもの場合と全く変わらない。

ひとりの青年は、机の上の絵の具を手に取り、絵筆からぼたぼたと絵の具を垂らし



ながららふらふら歩きまわる。多くの人が、その青年は落ち着きがなくて何もできない  
と思っっている。その青年と根気強く深く付き合っている造形の先生は、何人かの人が  
平和に集まっっていると、その青年は寄って来て、じっと座って力強く絵の具でか  
くのだと言う。その人と向き合ってかわる保育者は、通りすがりの人とは違った見  
方をしてる。青年もその人には人として応答する。この青年は、本気に肯定的に向  
き合う保育者とこれまで出会っていなかったのかもしれない。困ったと見える行動  
は、その人が保育者と出会って成長してゆく人生のひとつまにはかならない。大人に  
なっってから保育は、子どもと違っって時間がかかるし、一層骨が折れるが。

別のもうひとりのは、他人の髪を引っ張ったり、噛みついたり、冷蔵庫のドアを  
あけたりしめたりするのが常である。このような場面で、常識にかなわないその行動  
をどう止めるか、どう叱るかという事は職員の間でしばしば話される。私もその人  
とかかわるとき、自分が他人からどう見られているかを気にしており、そのことを本  
人は察知しているから、本当のかかわりになれないでいる。むしろ、私は、何事も起  
こっっていないときにこちらから優しく近づいて、ゆっくりとその人と積極的にかかわ  
ることをしてみようと思う。私は毎日かわる人ではないから、通りすがりの短時間



のかかわりしかできないのだが。

ひとりの若い職員（職員というよりも友達と呼んだ方がよい）は、皆の目を盗んでひとりで外出しようとする青年と、地域のホームで生活をはじめた。何か月もたないうちにその青年はひとりで留守番をするようになった。その職員との信頼関係の基礎の上にできたことである。毎朝その青年は、その職員に靴下をはかせてもらうのだという。靴下をはいた途端に脱いでしまい、また履かせてもらうことを何十回も繰り返してから出掛けるのだという。これと同じことが小さい子どもの生活では毎日起こっていることを幼児保育者はよく知っている。子どもを育てたことのないその若い男性職員は、青年の靴下に付き合うことが、更に自立した生活へのステップであることを知っている。

こんなことを体験している最中に、愛育養護学校の保育の場で、私はひとりの元気の子どもが、滑り台の上から三輪車に乗って滑りおりようとしているところに出会った。まわりにいた大人たちが「あぶない」と、行ってそれを止めた。下には他の子どももいたし、実際危なかった。滑り台の上には私は、三輪車を手で押さえ、そ



の子は大声をあげた。一瞬、私は自分のあり方が問われていると感じた。私は自分の向きをかえて、その子に、それはやれないことをゆっくりと話した。その子は、私の顔を見てうなずき、他の遊びを始めた。私は一緒に楽しく遊んだ。周囲の人達と一緒にになって私が止めさせようとしたときには、子どもは無理にでもやろうとし反抗した。周囲の目を気にするのではなく、その子と向い合っただけかかわることのたいせつさを、私はまたもや教えられた。

保育は英語では education and care と訳すが、そう考えると、保育は子どものことだけではなく、大人にもひろげて考えることができる。